Kチェアー

北村　俊道

私は幼い頃より絵を描いたり、ものを作ったりする事が好きだった。当時は、何かの遊びをする前にその遊びに使うものを自分で作らなければならなかった。その出来、不出来によって優位にたてるかどうかが決まってしまう。次はもっとよくしようと工夫する。そのちょっとしたアイデアが友達のあいだではやったりしたらもうリーダーだ。

そのうちプラモデル作りにうつり、何度もいろいろ組み立てていくと、プラモデルのルールの様なものがわかってきて、説明書なしでも箱の絵を見ながら作れてしまう。空間の中での立体の把握ができ、ちょっとした幾何、力学的な事を体で覚えてしまう。教科書ではちっとも頭に入らなかったのに。

そういえば、太古の人類の生活はそれこそ「つくる」の積み重ねだったはず。狩りの前に矢を作り、獲物をさばく刃を作り、家族のために器を、寝床を、家を作った。その中でさまざまな工夫がされ続け、今の私達の生活を築き、これからも工夫はされ

続けられる。

しかし、今は自分で工夫しない。誰かが考えたものを使っている。今使っているものがこわれたら自分で直せない。仕組みが、まるでわからない。では子どもたちはどうなのか。与えられたおもちゃが、なぜこう動くのかわからない。わかりたいから分解すると、おこられる。こうして、そろそろ家の中もよごさない、服もよごれない、コンピューターでお絵描きする様になるのか。はたして体全体で楽しむ事が出来るのだろうか。

製紙工場の倉庫で山積みの再生角紙筒に出合った時、ワクワクするものがあった。さっそく何か作ってみたくなった。材木の様な形状だが、もともと紙なのでいろいろ思う様にならない。そしてようやく、小さなイスの試作品ができた。幼児用である。

前にも述べた様に、私は今の子ども達のおかれている状況が、自分達の幼児期とかけ離れている事に

▲紙の筒がだんだん立体のイスになっていく

危惧を覚えている。電子音と、デジタル画像があふれている環境。そこへ子ども達が魅きつけられてしまうのは、しかたがない事だと思うが、だからこそ、その前に肌や体で感じる遊びを体験しておいて欲しい。豊かな感性を体ごとぶつけてほしい。

完成した紙筒のイスを見ていると、自分の中にあった子どもたちへの思いがあふれて来てこのイスに、世界中の子ども達が自由に絵を描いた展覧会はどんなに楽しいだろうと、夢みてしまった。さっそくいろいろ動いてみたのだが、うまくいかない。がっかり落ち込んでいると、ボストンの友人がボストンチルドレンズミュージアムの館長に紹介してくれた。そこで絶賛され、「必ず商品にしなさい」と強く背中をおされ、新たな展開に眠れぬ夜を何日も過ごしてしまった。

ダンボール色の簡素で、小さなイス。このイスに一体どんな商品としてのパワーがあるのだろう。

ためしに、私の娘、真裕子と一緒にこのイスを組み立ててみる事にした。小さい頃は私べったりの娘だったが、このごろちょっと距離をおかれて、父親としてはさみしい思いをしていたところだ。彼女はとても興味を示して、紙の筒がだんだん立体のイスになっていく過程を驚きの声とともに手伝い、イスに絵を描く段階では、家で飼っていたウサギの絵を、唄う様な一人言をいいながら楽しそうに描いてくれた。そのひと時は、私にとって、ひさしぶりに子どもとふれ合った楽しい時間と空間だった。

この経験から、このイスは「親子で『つくる』を楽しむ」ことが出来る商品として、私の頭の中で強く意識される様になった。

親子で一緒につくる事によって

1発見（ディスカバリー）　リサイクルしよう。すでにあるものを新しく生まれ変わらせる。

2協力（コラボレーション）　力を合わせよう。

3創造（クリエーション）　平面から立体へイメージを膨らまそう。オリジナルの絵を描こう。

4心（マインド）　お父さんとお母さんと一緒に作った特別なイスは、大事に使おう。

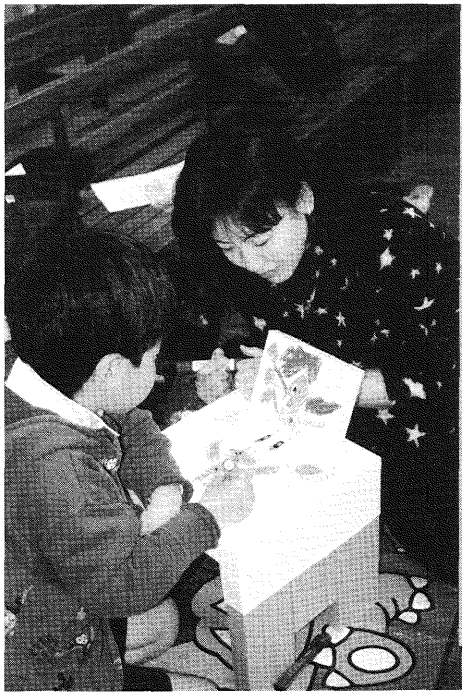
5記憶（メモリー）　子どもには楽しい時間の思い出、親には、このキズ、この汚れが「僕はこんな子だよ」と呼びかけてくれる。

という五つの要素を共に体験する事ができる。私はそれを、ファミリーエデュケーションと呼び、子どもはもちろんだが、親も色々な事が学びとれる教材の一つとして考えている。

自分の描いた絵のついているイスが、家の中にあることによって、幼児が自分のテリトリーを確保し、そこで安心して自分の世界を広げていく。その事がその子の自立の第一歩につながると思い、この簡素なイスの計りしれないあたたかさを発見したのです。

これが「ちょっとつくってみよう」から始まり「つくる」にこだわってそれを商品化してしまった「Kチェアー」のストーリーです。

大阪キッズプラザ、都内百貨店の手作りイベント、国立校の幼稚園での卒園イベント等で、おおぜいの親子さんに集まっていただき、イス作りをする場に私も御招待いただくことがあります。そこに



▲組み立てられたイスに絵を描く

は、二時間程の「つくる」時間を共有する、親子のほほえましい姿が、くりひろげられていました。

まるで、昔し昔しの親子の様に。

（㈱シェバル）

児童館の露天風呂作り

宮里　和則

夏。滝王子児童センターの庭。子どもたちは穴を掘っている。大きな穴だ。

スコップで掘ると、米屋さんからもらった袋に土を入れ土嚢を作っている。

露天風呂を掘っているのだ。

その横ではドラム缶風呂。煙がもくもくあがっている。

恒例になった夏休みの最後のイベント、露天風呂